

「すべては現場で覚えていった。
これからもアフリカで仕事を続けたい」

ナイジェリアのラゴス州保健省で保健医療サービス向上のための保健計画アドバイザーとして孤軍奮闘している古閑純子さん。もともと栄養士だった古閑さんがJICA専門家として成長する過程には、多くの人たちの支えがあった。



photo by Asada Yuki

ラゴス州の 保健セクターを支援

アフリカ大陸最大級の都市ラゴス。ナイジェリアの経済と文化の中心地であるこの町は、周辺から流れ来る人々で膨張を続けている。人口が1億を超え、有数の産油国でもあるナイジェリアは、サハラ以南アフリカにおける指導的国家を自認し、周辺国からも一目置かれる存在だ。だが、ここでもアフリカの多くの国が抱えるさまざまな問題に直面している。その一つが保健医療サービスの遅れだ。

例えば、ラゴス州の乳児死亡率は105（出生1000対、2002年）で、日本の3とは比べようもなく高い。しかもその数は年々増えている。また、医師の数も極端に少なく、10万人の患者を5人の医師で診ているというありさまだ。ラゴス州の保健状況の後退は、財政難に加え、急増する人口による環境の悪化が一因とみられている。こうした状況を改善すべく、ラゴス州では保健医療供給体制の立て直しが行われているが、その取り組みを支えるために「



今から11年前、日本から機材供与した施設を巡回したときの写真。古閑さんの隣が山形さん(タンザニア)

JICAから派遣されたのが古閑純子さんだ。昨年8月、州保健省にたつた一人送り込まれた古閑さんは、住民にとって一番近い、プライマリ・ヘルス・センターと呼ばれる診療所のニーズ調査をはじめ、日本型業務改善手法を用いた保健医療施設の

改善、JICAが実施中の環境衛生改善・マラリア対策プロジェクトのフォローアップなどに取り組み、保健省に次々と改善策を提案している。ヨハネスブルク、ナイロビと並んでアフリカで最も治安が悪いといわれるラゴスでは、毎日

の通勤時には安全対策のため古閑さんの車に警備員が同乗する。護衛付きの生活を「お姫様みたい。でもいわれているほど怖いイメージはないですよ」と笑い、保健省ではパワフルなナイジェリア人たちと丁々発止と渡り合う。一見、少女のようにも見える彼女の小さな体には、計り知れないエネルギーが宿っているようだ。

JICAとの出会い

古閑さんが途上国支援の仕事にかかわるようになったのは今から14年前。偶然の重なりと人との出会いが彼女のキャリアを形作ってきた。

小さいころからアメリカに憧れ、いつか留学したいと夢見ていた少女は、地元熊本の本学に在学中、チャンスをつかんで渡米する。通い始めたコミュニケーション・スクールのでまたま選択した栄養学に興味を持ち、本格的に学ぶため大学に編入して栄養士の資格を取った。しかし、帰国した日本ではアメリカの資格は通用せず、日本の国家試験を受けるには実地経験が必要だ



ナイジェリア タンザニア

Koga Sumiko
JICA専門家 古閑 純子

挑戦者たち
Stories of
Challengers
Vol.011

った。そこで、世界保健機関（WHO）で天然痘撲滅に貢献した蟻田功医師に頼みこみ、蟻田氏が執筆する感染症の本をまとめる手伝いをすることを条件に、当時彼が院長を務めていた病院に栄養士の見習いとして置いてもらうことになった。



タンザニアでのカウンターパート、マレロ医師（中央）と。彼には信頼関係の構築がいかに大事が教わった。左端は井関基弘短期専門家（当時）

誘われるまま病院側のコーディネーターとして研修にかかわっていった。「それまで途上国には行ったことはありませんでした。研修員のお医者さんたちと接して、途上国にはいろんな問題があることを知りました」

そのうち、JICAの専門養成研修を受ける機会に恵まれ、「ジュニア専門員」²という制度を知り、「ダメもと」で応募。試験に合格し、専門養成研修で初めての途上国、フィリピンを体験した。このころには途上国の保健分野にかかわっていく気持ちが高まっていったという。

専門家として育ててくれたタンザニア

ジュニア専門員になって1年後の1995年2月、古閑さんはタンザニアの海沿いの町、タンガにいた。肩書きは「マラリア対策のための社会開発」の専門家。任務はコミュニティベースで住民の参加を得ながらマラリアをなくしていくこと。当時、同国に派遣されたマラリア対策のJICA専門家はもう一人いた。中米やアフリカ各地で

活躍してきた寄生虫対策のベテラン、山形洋一国際協力専門員だ。マラリアに関しては素人同然だった古閑さんは、相手国政府や援助機関との付き合い方、アピールの仕方など、アドバイザー型専門家としての仕事を山形さんに一から教わった。

「小さな体でぐるぐる動く、物事に対して積極的。笑顔がさわやかで他人の話をよく聞く。これは、古閑さんに出会ったとき山形さんが抱いた印象だ。専門家はいくつもの仕事を仕掛ける獵師。根気よく餌を変えながら相手の出方を待つ。困ったときはばか笑い」という山形さんからのアドバイスを受けつつ、マラリアに苦しむ人々の間でそれがどんな病気なのか、何が問題なのか、身をもって覚えていった。

タンザニアではもう一人、忘れられない人がいる。保健省マラリア対策のプログラム・マネージャー、マレロ医師だ。彼と



マラリアを媒介するハマダラ蚊の繁殖源(タンザニア)。流れのない水たまりのあるこのような湿地帯が蚊の発生源となりやすい

はタンザニア国内の看護師に対するマラリア治療の研修に取り組んだ。これらの活動はその後JICAの技術協力プロジェクトへと発展し、古閑さんが残した研修用テキストは改訂を繰り返して今でも使用されている。「研修が成功したのもマレロさんとの信頼関係あってこそ」と振り返るが、最初から彼の仲がうまくいったわけではない。「アフリカって男社会ですよ。まず、女に何ができるんだ」というようなことを言われたんです。一瞬、むっとしたんですけど、それが第1日目でした」。

1 アメリカのボランティア活動機関。
2 途上国などで国際協力の経験を有し、かつ将来にわたり国際協力の分野での活躍を志望する人を対象に、JICAでの国際協力の実務研修の機会を提供する制度。
3 「整理・整頓・清潔・清掃・躰」を徹底した業務改善の取り組み。

いきなり否定的なことを言われ、彼と接するのが嫌になってしまったが、「自分は何をしにここに来たのか考え直したんです。すると、まずこの人たちとうまくやっていかなきゃいけないことに気が付いた。分からないことは彼に教えてもらおうと決めた



ラゴス州保健省が実施した薬剤無料配布の式典にて

のです。保健医療の専門家という看板を掲げていても、医者領域は知らなくて当たり前。何かにつけてマレロさんに相談するようにして1年たったころ、彼も必要な情報を古閑さんに報告し、アドバイスしてくれるようになった。「このときの教訓は今も生かされていますね」。

タンザニア人とナイジェリア人

タンザニアで国際協力専門家としてのキャリアを始め、2年前からはナイジェリアとの付き合いが続いている古閑さんは、アフリカが大好きだと言いつつ、「タンザニアにいたことが来たとき車で出かけたら、わだちには

まって動けなくなってしまうんです。すると、通りがかったバスからみんなが降りてきて車を抱えて動かしてくれたんですよ。嫌なことはいっぱいあったけれど、タンザニアの人に受けた親切は忘れられないですね」

一方、現在滞在するナイジェリアには、タンザニアとは違った良さがあるという。「こちらの人はとても押しが強い。オフイスで大声で怒鳴り合い、嫌だな、明日行くの、ってよく思うのですが、出勤すると向こうから笑顔で、やあ、元気か?」と。昨日のケンカは何だったんだろう、みたいな（笑）。皆さん、竹を割ったような性格なんですね」。

今、ラゴス州保健省に身を置き、ナイジェリア人の高い自主性に感心している。そこで彼の自尊心をくすぐりながら改善策を提言するテクニクは、タンザニアで身に付けたものだ。今後マラリア対策にかかわっていくつもりだが、まずはベイスとなる医療サーブिस全体の改善のため、半田祐一朗国際協力専門員の協力を得ながら日本、アジアで生産性を上げた5S活動³に取り組んでいる。「アメリカ大好き少女」は、日本の諸先輩や現場のアフリカ人カウンターパートに鍛えられながら、「アフリカ大好き専門家」へと変身を遂げた。今後もアフリカ人に囲まれながら、この地の魅力を発見していくことだろう。



同僚のバースデーパーティーにて。ラゴス州保健省の仲間女性ばかり

アフリカの魅力は人間的な触れ合い。落ち込んでいてもアフリカ式あいさつが元気をくれる

マラリア対策の難しさ

マラリアのまん延防止は国際社会の大きな課題となっている。特にサハラ以南アフリカでの感染が深刻で、古閑さんの同僚もマラリアにかかりつらそうに仕事をしていることがあるという。治療が遅れると死に至ることもある恐ろしい病気だが、人々の間には「怖い病気」というイメージがない。それは、抗マラリア薬で治るからだ。

タンザニアでは患者は症状が治まるまで投薬をやめず、マラリア原虫が体内に残ったままになり、その患者から感染が広がるのが問題となっていた。「私たち日本人も風邪の症状が治まったら薬を飲まなくなることを考えると、治療の徹底は容易ではありません」と古閑さんは言う。予防には蚊帳が効果的だが、暑い地域では通気性の悪い蚊帳の中で寝る習慣がない。また、地方では長方形の蚊帳は棺に似ているためその中で寝ることに抵抗を感じる人もいる。さらに、都市部の住環境が劣悪なラゴスでは、一部屋に5人以上の家族が住んでいることもまれではないため、蚊帳の利用が難しい。

実は古閑さんもマラリア経験者だ。「抵抗力の少ない子どもがこの病気で死ぬことを、身をもって体験しました。それ以来、マラリア対策にさらに真剣に取り組んでいる。

Koga Sumiko

こがすみこ JICA専門家。1960年熊本市出身。カリフォルニア州立大学卒業後、国立熊本病院地域医療研修センター、(財)国際保健医療センターを経てJICAジュニア専門員に。95年から3年間個別派遣専門家としてタンザニアへ赴任。英国のキール大学大学院で保健計画・マネジメントのMBAを取得後、国際協力銀行(JBIC)専門調査員として円借款のインフラ案件に保健の視点を組み込む仕事に携わる。2004年からはJICAの調査団などでナイジェリアの保健分野の協力に携わり、05年8月より現職。